

調査報告

クビアカツヤカミキリに対する農薬登録促進に向けた取り組みについて

一般社団法人 日本植物防疫協会 ふな 舟 き 木 ゆう 勇 き 樹

はじめに

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* はモンゴル、中国、朝鮮半島、ベトナム等に分布し、主にバラ科の果樹や樹木を加害する害虫である (EPPO, 2015)。国内においては2012年に愛知県のサクラとウメで初めて発生が確認されて以降、埼玉県、群馬県、東京都、大阪府、徳島県、栃木県においてサクラ、ウメ、モモ等で発生が確認されている (中野, 2018)。なかでも、徳島県では2015年にモモ、栃木県では2017年にモモおよびスモモの経済栽培園で甚大な被害が確認され (栃木県, 2017; 中野, 2018)、さらに2018年には東京都の生産園でウメの被害が確認される (東京都, 2018) 等、農業生産現場での甚大な被害が問題となっており、今後さらなる拡大が懸念されている。

そこで2017年11月に関係5府県のほか、農林水産省消費・安全局植物防疫課、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門、国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 (以下、森林総研) および当協会の関係者が集まり、クビアカツヤカミキリ防除対策にかかる情報交換が行われた。この中で被害拡大の防止のためにも登録薬剤を早急に整備していく必要が強く示されたことから、当協会がクビアカツヤカミキリ特別連絡試験を組織し、関係機関の協力のもとで早期の登録薬剤整備に向けて試験に取り組むこととなった。他方、2018年1月に本種は特定外来生物に指定され、飼養・運搬・野外への放出等が原則禁止となった。これらの制約の中での的確な薬効試験の実施に尽力した結果、2018年の試験は順調に進められ、登録取得に向けて着実に前進しつつある。本稿ではこれらの取り組みの概要を紹介する。

I 試験方法の確立

本種の雌成虫 (図-1) は樹木の幹や主枝の樹皮の割れ目に産卵し、ふ化した幼虫は樹体内部に食入し、食入口からフラス (糞と木屑の混ざったもの) を排出する。幼虫は樹体内で2~3年かけて成長し、6~8月上旬に成虫となり脱出する。成虫はクヌギの樹液などを摂食することはあるが、性成熟に後食を必要としない (桐山ら, 2015; 中野・渡邊, 2017)。早急な対策が迫られる本種に対してはこれら生態を考慮し、いくつかの防除場面を想定した試験方法により有効な薬剤を見いだす必要がある。防除場面としては、①薬剤散布により羽化した成虫を防除する、あるいは樹に予防的に薬剤散布し、飛来した成虫の産卵を防ぎ被害の拡散を防止する、②すでに産卵されてしまった樹に対しては、樹幹散布や樹幹注入、打ち込み剤等により卵、幼虫を防除し、その樹を守る、③被害が進み幼虫の防除が困難な樹は伐採することになるが、その伐倒木が成虫の発生源とならぬよう、くん蒸処理などにより樹体内の幼虫を死滅させる、等が考えられる。これら防除場面を想定した3種の試験方法を以下の通り定めた。

1 幼虫を対象とした試験

幼虫に対する薬剤の効果を確認するためには薬剤処理前の幼虫数を調査し、処理後の生存幼虫数の推移を調査することが理想であるが、幼虫は樹体内部に穿孔してい



図-1 クビアカツヤカミキリ雌成虫

The Emergency Approach to Pesticide Registration for the Red-necked Longhorn Beetle, *Aromia bungii*. By Yuki FUNAKI
(キーワード: クビアカツヤカミキリ, 試験法, 防除効果, 農薬登録)